

## 2025年度一般入学試験 前期日程問題

# 英語・数学・日本史・世界史・国語 (2科目選択)

### 注 意 事 項

1. 試験開始の指示があるまで問題用紙を開かないこと。
2. 2科目を選択し、解答すること。
3. 各科目の問題はつぎの順番になっている。
  - 「英 語」・・・・・・・・・・ 1～3 ページ
  - 「数 学」・・・・・・・・・・ 4～5 ページ
  - 「日本史」・・・・・・・・・・ 6～12 ページ
  - 「世界史」・・・・・・・・・・ 13～27 ページ
  - 「国 語」・・・・・・(後ろから) 1～8 ページ
4. 選択した2科目の解答用紙の所定欄に受験番号を記入すること。
5. 解答時間は2科目連続で80分である。科目の解答順、時間配分は自由とする。  
(科目間の休憩は設けていない。)
6. 使用しない解答用紙等は、計算等に使用して構わない。
7. この問題用紙は持ち帰ること。

国

語

一

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ロスジェネに限らず世代にかかわる名前（Z世代、ゆとり世代、新人類ジュニア、等々）は、一定の範囲の人々をある共通の特性によってくる（カテゴライズする）ためのものである。このくくり（カテゴリー）はしばしば、対象を中立的に記述するものというよりは、何かを達成する過程の一端として動員される。たとえば、若者の常識のなさや学力の低さの原因を理解しようとしつつ同時にそれを押搦<sup>や</sup>するため、「ゆとり世代」という言葉が動員されたように。あるいは、ロスジェネと団塊ジュニア<sup>a</sup>は世代として大幅に重なっているのだが、かれらをロスジェネと呼ぶのか団塊ジュニアと呼ぶのか、どちらのカテゴリーを用いるかによる違いは大きいだろう。

（中略）

まず確認すべきは、ロスジェネが「世代」（ジェネレーション）と呼ばれるくくりのひとつであり、出生年によって区切られた集団であるということだ。ロスジェネという言葉を広く知らしめるきっかけの一つとなった朝日新聞の連載記事によれば、それは一九七二年から一九八二年の間に生まれた者たちを指す。もちろん出生年のどこに具体的な区切りをいれるのかは論者によってある程度異なるであろう。

ただし、あたりまえのことだが、出生年それ自体が意味をもつわけではない。出生年が重要となるのは、同じ時期に生まれた人々がある出来事と同じ年齢層で経験するかぎりにおいてである。その出来事とは、ロスジェネの場合、まずは就職難である。ロスジェネが「就職氷河期世代」という用語とゴカ<sup>①</sup>ン的に用いられるのはそのような事情による。

同じ年齢で一緒に経験した出来事が、彼らに強く、長く影響を与えたと考えられるときに、世代というくくりが意味をもつ。言い方を変えれば、その経験は、彼らに共通の価値観、ものの見方、行動の仕方などを長期的に刻印するだけの強度を持っていると信じられていなければならない。

A

、ロスジェネ（就職氷河期世代）を世代として語るとい

うことは、その共通経験の強度について語るということでもある。

けれども、この言葉のその後の成り行きは、それが「世代」であるということにいくらかの疑念をなげかけるものである。

たとえば、先に触れた特集記事からほぼ一〇年が経つ頃、朝日新聞は次のような一節から始まる記事を掲載した。

就職氷河期を経た二〇〇〇年代後半の日本で、「ロストジェネレーション」（ロスジェネⅡ失われた世代）という言葉が一世を風靡した。安定した収入を得られず、職を転々とする若者たちは、「豊かな」社会のひずみを体現する存在として注目を浴びた。だが、「ロスジェネ」論壇とも呼ばれた活発な議論の姿はすでない。なぜ失われたのか。

「一世を風靡した」「なぜ失われたのか」といった表現は、ロスジェネという言葉の衝迫が一時的なものであり、二〇一八年の時点で失われてしまっていることを読者との共通の前提にしている。世代というくくりが、歴史的な出来事によって刻印された長期的な特性について語るための仕組みであるとしたら、それが一時的であつたり、失われてしまうものであるというのは奇妙なことではないか。

この記事のなかで雨宮処凛あまみやかりんのコメントが次のように紹介されている。

結局「世代論」にとどまってしまった、と振り返る。一時的に同情を集めたが、「若者の**うち**は社会全体の投資対象bでも、中高年になればただの努力不足、自己責任と言われる。社会問題としてではなく、若者論として消費された」と話す。

世代論と若者論との混同がみられるが、それを整理したうえで言い直すと、世代の問題であるはずのものが若者論として消費されてしまった、ということであろう。ここでいう若者論は、若者と呼ばれる人生の段階に結びつけて何かを語る語り方であり、当該の若者が若者でなくなってしまうえば消滅してしまうものである。世代が若さと結びついて語られるとき、そのくくりは一定の訴求力を持ち、若さと結びつけられなくなるにつれてメディアから忘れられていく、雨宮の指摘をそのように受け取ることができる。

(中略)

ロスジェネを世代としてくることの信憑性を支えているのは、先に触れたように、彼らが一〇代の後半から二〇代の前半にかけて厳しい就職状況とともに経験したという事実である。学校(教育)から仕事(労働市場)への移行が揺らぎ始めた時期に、彼らは社会に出ることを余儀なくされた。このことがもたらす様々な苦難が、この世代に他の世代とは異なる特徴を刻印した——という想定が、ロスジェネというカテゴリーの現実性を支えている。

当時の労働市場の厳しさやそれによって当該世代が直面した困難については多くの人が指摘している。ここでは、それが刻印したとされるいくつかの特性に注目してみたい。

第一に、「ロスジェネは不幸であり、不遇感を抱えている」といったイメージである。

「ロスジェネ論壇」がしばしば用いていた言い方を借りれば、この不幸や不遇感にはふたつの要素が含まれている。

ひとつは生存の問題、つまり生活の経済的な土台がクズレテしまっている②ということ。もうひとつは承認の問題、つまり彼らが他人からあるいは社会から十分な敬意を払われていないということだ。

この点について青少年研究会が一九九二年以来一〇年ごとに東京都杉並区・兵庫県神戸市灘区・東灘区で継続的に行なっている若者調査(一九九二年、二〇〇二年、二〇一二年、二〇二二年に実施)およびその追跡調査である中年調査(二〇一二年、二〇二二年に実施)の結果をしてみる。先のふたつの問題と比較的關係が深いと思われる、次のふたつ

の質問項目をここでは取り上げる。

生活満足度…現在の生活に満足している（「そうだ」から「そうではない」まで四段階）

自己好悪…あなたは今の自分が好きですか。それとも嫌いですか（「大好き」から「大嫌い」まで四段階）

後者の質問は、自分は他人からの承認を得られているかどうかという点について、その効果であると考えられる自己への承認（自己への好悪感情）から、間接的に推測しようとするものだ。

この調査の実施年・対象者との関係でいうと、ロスジェネとされる人々は、一九九二年に一〇代、二〇〇二年に二〇代だった回答者にほぼ重なり合う。生年で言うところ、一九七三〜八二年生まれの人々である。彼らはこのふたつの時点での調査の対象となり、二〇一二年に三〇代、二〇二二年に四〇代として中年調査の対象となっている。

このデータを用いて、ロスジェネが一〇代、二〇代、三〇代、四〇代の各時点で、他の世代が同じ年代（年齢層）だったときと比較してみたい。

このようなやや煩雑な手続きを踏むのは、年齢による変化とは区別される、世代による違いを取り出すためである。たとえば生活満足度は、どの世代についても若い頃と高齢期に高く、五〇代前後で「c」を打つU字型を描くことが知られている。B、年代をそろえて比較しないと世代の違いをあきらかにすることができない。

まず生活満足度についていうと、一〇代、二〇代の時点でロスジェネは他の世代と比較して満足度が低い。だが、三〇代、四〇代の時点では他の世代と比較して特段の違いは見出されなかった。つまり、ロスジェネは一〇代、二〇代の頃には他の世代（が一〇代、二〇代だった頃）よりも生活満足度が低かったが、その後、三〇代、四〇代になる頃には他の世代（が三〇代、四〇代だった頃）との違いは見られなくなったということだ。

次に自己好悪についていうと、おおむねどの時点で見てもロスジェネと他の世代との間には違いが見られなかった。

（中略）

以上のことは、「ロスジェネ」という言葉のなりゆきにいくらかの示唆を与える。

第一に、ロスジェネが二〇〇七年前後に注目を集めたのは偶然ではなかっただろうということだ。「ロスジェネ論壇」がそうであったように、声をあげずにはいられない、かれらの生活への不満がその動力となっていた。

第二に、C、ロスジェネ論壇などを通しての自己了解とはやや異なり、この動力は基本的には生活への不満に由来するものであり、<sup>③</sup>ジソン感情を損なう承認の不在ではなかったように思われる。

そして第三に、この動力はロスジェネが三〇代、四〇代と年齢を重ねるにつれて弱まっていった。その結果としてその言葉の衝迫は「失われた」のではないか。

(中略)

ロスジェネが「失われた」あと、いわゆる「ロスジェネ論壇」を形成していた論者たちは、それぞれ具体的な領域でその議論を実り多い形で展開してきた。それは労働問題であり、フェミニズムであり、男性論、等々である。「失われた」のは議論の実質ではなく、その議論を「世代」としてくくろうとする視線のほうであろう。

そして、そのような視線の後退にはそれなりの理由がある、というのがここでのロスジェネ像が示唆するところである。むしろ彼らの議論は、世代という枠組みから自由になることで、より「d」になったようにも思われる。

たとえば、ロスジェネ論壇の中心的な主題であった労働問題は、現在では世代や年齢層の問題というよりも労働者全体のそれとして議論されるようになってきている。ロスジェネと結びつけて主題化されてきた「非正規雇用」の問題は、「正社員」になりにくかった世代の問題というよりは、雇用形態の違いが待遇の大きな格差と結びついている制度や構造の問題であると考えられている。また、もうひとつの主題であった性差別の問題も、ある世代の問題というよりはすべての人に関わるものとして議論されるようになってきている。なかでも、古典的な「弱者」ではないような「曖昧な弱者」が登場してきているという伊藤昌亮の指摘は重要である。

D、ロスジェネをあらためて論じようという動向のなかにみられるいくつかの語りには、やや懸念を感じることがある。一見ロスジェネに同情的、共感的であるようでいて、結果的には彼らの否定的な像を形成することになってい

るのではないか、という点である。

もしそうであるなら、それはロスジェネが若い頃に受けてきた印象論による根拠なき非難（いわゆる「若者バッシング」）の「ゾウホ改訂版」<sup>④</sup>のようにもみえる。そのようなやりかたでたとえば「曖昧な弱者」について論じるなら、その弱さの由来をつかみそこねてしまうだろう。そこから発せられる言葉は、彼らを批判するものにせよ受容するものにせよ、彼らに届くことはあるまい。必要なことは、いったんは世代（ジェネレーション）から自由になって、失われたもの（ロスト）について実質的に考えてみることはないだろうか。

（浅野 智彦『ロスジェネとは誰のことか』一部改変）

問一 二重傍線アゝエの漢字の読みをひらがなで書きなさい。（2×4＝8点）

問二 傍線①ゝ④のカタカナを漢字に直しなさい。（送りがある場合は送りがないも書きなさい）（2×4＝8点）

問三 空欄 A   D   に入る最も適切な語を1ゝ5から選び、番号を書きなさい。（同じ語は一度しか使えない）（4×4＝16点）

- 1、しかし      2、その一方で      3、まず      4、そのため      5、つまり

問四 「団塊世代」の子どもにあたる世代を指す、波線 a 「団塊ジュニア」という言葉は、一般的にはどういう意味で使われるのか、次の中から一つ選んで、その番号を書きなさい。（6点）

- 1、若いということ、大多数の人が一致した考え方を共有している世代
- 2、「ゆとり教育」とは対照的に、学校で厳しい詰めこみ教育を受けた世代
- 3、安定した経済状況で出生率が高く、人口が多かった世代
- 4、経済が低迷した状況で出生率が低く、人口が少なかった世代

**問五** 波線 b 「若者のうちは社会全体の投資対象」とはどういう意味か、四〇字以内で分かりやすく書きなさい（8点）

**問六** 「c」に入る適切な漢字を一字で書きなさい。（6点）

**問七** 「d」に入る適切な言葉を次の中から一つ選んで、その番号を書きなさい。（6点）

- 1、抽象的
- 2、実質的
- 3、象徴的
- 4、形式的

**問八** 波線 e 「曖昧な弱者」とは、どういう「弱者」か、全体の文脈から、もっとも正しいと考えられるものを一つ選び、番号を書きなさい。（6点）

- 1、実際は弱者に属さないのに、自ら弱者を装う者
- 2、実際は弱者であるが、社会的に弱者として十分に認められていない者
- 3、実際は弱者ではないが、社会から弱者の部類に見られてしまう者
- 4、実際は弱者なのに、自尊心から弱者扱いされることを拒否しようとする者

問九 次の1～4のうち、筆者の見解と一致するものには「○」を、一致しないものには「×」をつけなさい。

(5×4＝20点)

1、「失われた」のは、ロスジェネの世代論自体ではなく、主にメディアにおける、ロスジェネへの関心である。  
2、ロスジェネ論議の中心的な主題が世代を超えて広がったのは、それらが社会の制度や構造にかかわる問題だったためだけではない。

3、ロスジェネの世代論が「若者論」にすり替えられたのは、この世代の意識に生存の問題は存在しても、承認の問題は不在だったからだ。

4、「曖昧な弱者」論議にも、ロスジェネと相通じる傾向があり、同様に世代を超えた視点が求められる。

## 二

次の漢字の読みをひらがなで書きなさい。(1×10＝10点)

- |      |      |                        |                  |                  |
|------|------|------------------------|------------------|------------------|
| ① 敷設 | ② 釣果 | ③ (王に) 封じ <sup>ル</sup> | ④ 産毛             | ⑤ 鑄 <sup>ル</sup> |
| ⑥ 童歌 | ⑦ 拐取 | ⑧ 推戴                   | ⑨ 彩 <sup>ル</sup> | ⑩ 白夜             |

## 三

次の傍線部のカタカナを漢字に直しなさい。(送りがある場合は送りがなも書きなさい)

(1×6＝6点)

- |                              |                            |
|------------------------------|----------------------------|
| ① スイも甘いも知り <sup>ス</sup> 尽くす。 | ② おハチが回 <sup>ハ</sup> ってくる。 |
| ③ 将来をキグ <sup>キ</sup> する。     | ④ カスカニ漂 <sup>カ</sup> う。    |
| ⑤ イヤオウなしにやら <sup>イ</sup> せる。 | ⑥ 神社にモウ <sup>モ</sup> デル。   |